

【学会見聞録】

Biology of Aging, Gordon Research Conference (GRC)

Grand Summit Hotel at Sunday River, Newry, ME

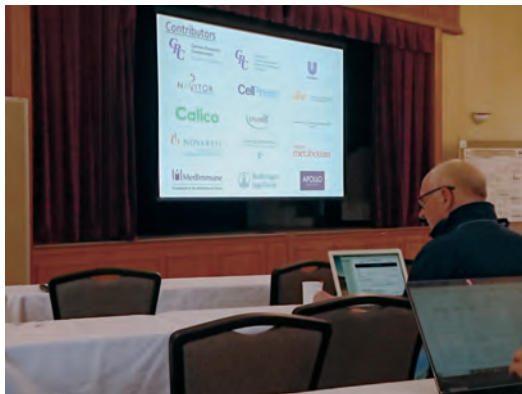
石井 恭正

東海大学医学部 分子生命科学

2年毎に開催されているGRC, Biology of Agingミーティングは、今年はMolecular, Cellular and Physiological Determinants of Lifespan and Healthspanをテーマに、7月14日から19日の日程で、米国メイン州・サンデーリバースキーリゾート・グランドサミットホテル（ボストン・ローガン国際空港からバスで3時間程揺られた山中にあります）にて開催されました。250名程度が参加した本会は、Harvard Medical SchoolのMarcia C. Haigis教授とStanford UniversityのThomas A. Rando教授により主催され、9つのセッション（シグナル伝達・橋渡し研究（Translational Research）・エピジェネティクス・ゲノム不安定性・代謝・恒常性・栄養・幹細胞・細胞老化）に分かれ、招待演者とポスターセッションから選出された演者による講演をそれぞれ聴講できる機会となりました。



研究成果はより分子細胞生物学的な解析に落とし込まれたものになり、幹細胞や細胞老化の研究成果はより個体レベルでの病態あるいは人体生理学的な解析結果を踏まえたものになっていました。Insulin/IGF, mTOR, Sirtuinなどのシグナル研究は、周知のとおり老化のTranslational researchをリードする内容となっていました。



GRCの規約上、講演内容を紹介することができず、残念に思います。自然科学研究はより細分化されていく中、老化に関連したそれぞれの研究者が、いずれも自身の専門分野からより横断的な研究を推進しようとした成果を報告しているとの印象を受けました。エピジェネティクスやゲノム不安定性の研究成果はより細胞生理学機能に迫るものとなり、代謝や恒常性などの栄養学的な

GRCではUnpublishedデータを発表することが義務付けられているので、特に招待演者は発表内容に気を使っているのが見受けられました。また、発表前にはPI（研究グループ主宰者）としての指導方針を必ず紹介することになっていて、本開催中に募集採用の対応をすることが強く推進されており、ポスドクや学生がCoffee Breakの時間に声を掛けるシーンを多く見受けられたのが、とても印象的でした。人材の流動性や若手研究者へのチャンスの構築を皆で声を揃えて斡旋している姿が、



連絡先：石井恭正

〒259-1193 神奈川県伊勢原市下糟屋143

TEL: 0463-93-1121 (2650)

FAX: 0463-94-8884

E-mail: ishiit@tokai.ac.jp

とても羨ましくも感じられました。日本では、新学術研究領域の班会議が当会議のような機会となっていることを伺い知ることができます。しかし、各学会（小さい規模の学会は特に）でも人材の流動性や若手研究者へのチャンスの構築をサポートする体制を整えるべく、まずは人件費を十分に賄えるような研究費を潤沢に獲得していく目的でも、その場に集うPIが率先して研究グループコミュニティを構築していくことが重要だと再認識させられる機会にもなりました。

筆者自身は、GRCへの参加は15年ぶりで、前回参加した会はミトコンドリア関連のものでしたので、とても新鮮な会となりました。参加者の大多数は、CSHL（Cold Spring Harbor Laboratory Meeting）や Keystone Symposiumに参加されている老化研究者と変わらない印象を受けましたが、多くの人が顔見知りと思う存分会話を楽しめるとても良い機会となりました。GRCにほぼ毎回のように参加されている常連の先生方の感想は、近年の会にはなかった幅広く横断的な研究成果が多く聴け、新鮮で大変勉強になったとのことでした。日本基礎

老化学会からは、国立長寿医療研究センターの佐藤先生と浜松医科大学の伊藤先生が参加されておりました。今回は、今回の参加者の投票によりヨーロッパでの開催が決定しております。是非、本学会員の皆様とご一緒できるのを、楽しみにしております。

